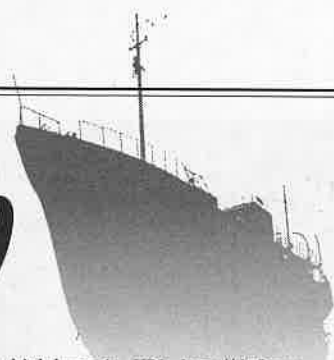


福竜丸だより

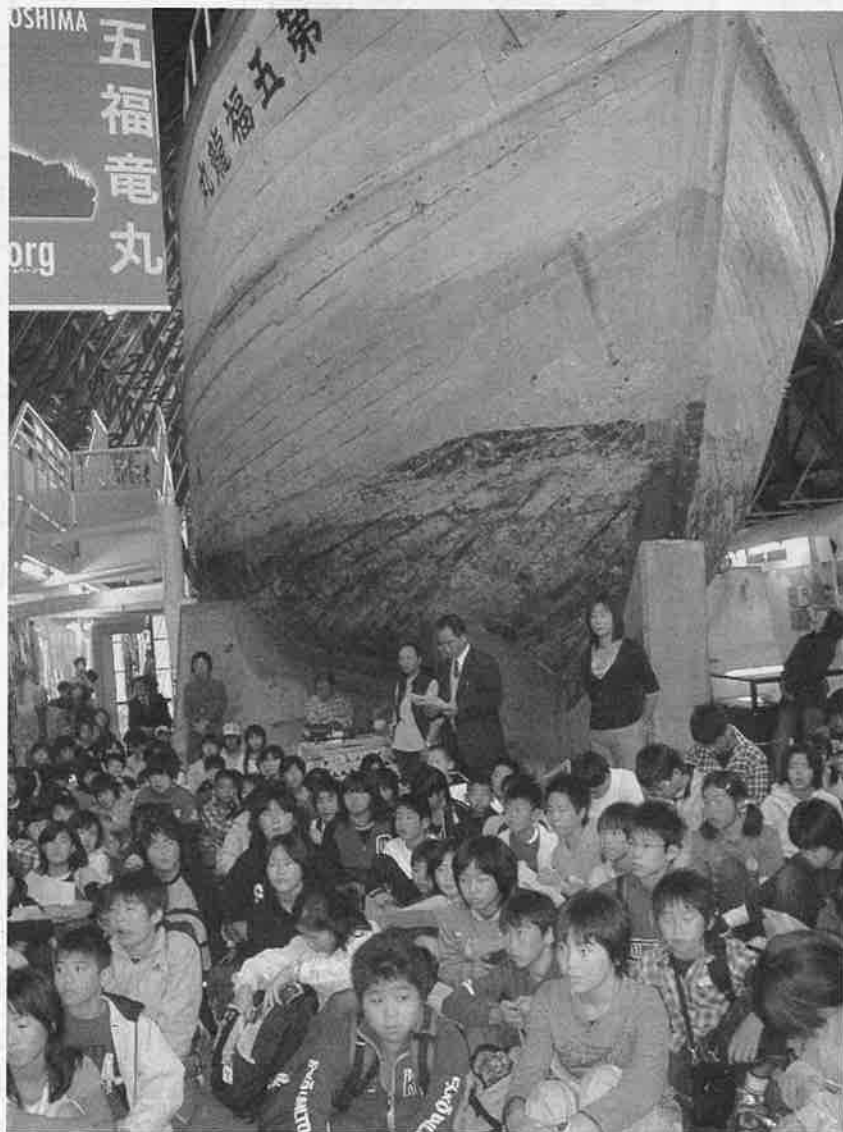
発行：財団法人 第五福竜丸平和協会 連絡所：東京都江東区夢の島3-2 〒136-0081 第五福竜丸展示館内

Tel.03-3521-8494 Fax.03-3521-2900 E-mail:fukuryumaru@msa.biglobe.ne.jp URL http://d5f.org



ヒロシマ・ナガサキ被爆六〇年 平和と原水爆のない未来へ向けて

財団法人第五福竜丸平和協会会長 川崎 昭一郎



第五福竜丸展示館を訪れる小・中学生・高校生は約四万人、ボランティアガイドの話に目を輝かせ船とともに航海に出る

明けましておめでとございます。

昨年は第五福竜丸事件五〇周年で、皆様のご協力の下に記念プロジェクトd5 f 50の諸行事を成功裡に実施でき、深く感謝いたしております。

今年、上記三ヶ年プロジェクトの最終年になり、同時にヒロシマ・ナガサキの六〇年を迎えましたので、決意を新たに平和と原水爆のない未来へ向けての努力を進めるつもりです。

一方では、「二〇〇五世界物理年」と定められています。

アインシュタインが二六歳の若さで、特殊相対性理論、光量子仮説と光電効果の解明、ブラウン運動の気体分子運動による説明の三論文、いずれも現代物理学の基本に関する重要な業績を一九〇五年に発表してちょうど一〇〇年目に当たるからです。

物理学を学ぶ楽しさを広く知らせ、研究と教育、科学と社会について考える様々な行事が内外で行われます。

第五福竜丸展示館においても、来館する生徒たちに、ピキニ水爆事件の持つ社会的歴史的な意味と併せて、そこに含まれている自然科学的内容を地道に、持続的に伝えていくことの大切さを改めて痛感いたします。

皆様のご健康とご発展をお祈りするとともに、私ども第五福竜丸平和協会の事業と展示館に対する変わらぬご支援ご鞭撻をお願いする所です。



愛と平和の
守り手として
久保山忌句会
田中千恵子

ビキニ被災五〇周年記念展より

海が生臭い久保山愛吉たちがいる

漆畑利男

ヒロシマへ遺したまゝの一九の眼

相原左義長

眼底の西から日の出ビキニデー

敷地あきら

第24回久保山忌

船員証作品

死の灰沁む胸幅蒲団蒸す秋に

石川貞夫

ビキニ語れば漁師の顔になる九月

柄澤なをこ

当日句会作品

被爆緯度突き指すバラの花ことば

望月たけし

竜胆の碑へ打電音ヒカクヒカク

沖 正子

母と紬と句と船腹に久保山忌

井上幸男

一枚の古い写真がある。東京・夢の島のゴミの中に埋もれ傾いて船体に「俳句人」の旗がはためいている。船名は「はやぶさ丸（第五福竜丸）」。一九六八年十一月、廃船として投棄されていた第五福竜丸を初めて訪ね、吟行を行った時のものである。

俳人たちは廃船の保存運動をと

もにし、吟行をかさね、八一年に久保山忌句会が発足した。きかっけは、当時第五福竜丸平和協会専務理事・展示館長の広田重道氏から新俳句人連盟に「句と作品展示」の要請があり、連盟は取り組みを決定。原爆忌東京俳句大会実行委員会も賛同し、三者主催の句会が誕生したのである。

毎年、久保山愛吉さんの命日である九月二三日に福竜丸に集い、愛吉さんの遺言碑にりんどうを献花し、その後句会を開く。平和の祈りをこめた句会は二四回を数えた。

被災五〇周年に記念俳句展

ビキニ被災五〇周年にあたって第五福竜丸展示館が企画した記念プロジェクトに、久保山忌句会は「色紙・短冊展」で参加することになった。作品を書くために焼津の三・一ビキニデーに吟行を行い、肌

寒い小雨の中、全国各地から三一名が参加した。

「色紙・短冊展」は福竜丸の船体の前、一三メートルの黒いボードに着物や帯を配し、三氏の染筆を筆頭に焼津でかかれた六〇余句を張り出した。作品は展示館で二日間、原爆・水爆の悲惨を熱く、生々しく訴えかけた。

第二四回久保山忌句会（二〇〇四年）は、「色紙・短冊展」の初日であった。句会での優秀作品には、平和協会から毎回「船員証」が授与される。受賞者は八第五福竜丸の特別船員として、愛と平和の守り手となる名誉と責務を負う。

吟詠に平和をねがい

ビキニ被災から五〇年の歳月を経てもなお平和はやってこない。私たちをとりまく現実、イラク派兵、拉致問題、年金などきびしい状況だが、中でも焦眉の問題は憲法九条の「改悪」である。世界に誇れる戦争放棄の条文を決して消してはなるまい。

私たちの俳句はわずか一七文字の短詩だが、地球上のすべての地に平和を、と訴え続けていきたい。（たなか ちえこ／新俳句人連盟副会長）

*この作文は、第五福竜丸の被災50周年を記念して焼津市がおこなった市民集会（8月2日）にて発表されました。ご本人の了解を得て紹介します。

第五福竜丸事件を語り継ぐ

焼津市立豊田中学校三年 海野 有香

第五福竜丸事件を調べていく中で、私の心に強く焼きついた一枚の写真があります。

久保山愛吉さんの遺影を娘さんが抱きかかえ、妻のすずさんをはじめご家族の方々が、涙をこらえて合掌する姿を写したものです。すずさんの悲しみに打ちひしがれた姿、幼い娘さんたちの泣きじやくる姿からは、大きな悲し



久保山愛吉さんの墓前にて

みや苦しみが伝わってきました。この一枚の写真に凝縮された深い悲しみを決して忘れてはならない、繰り返し返してはならないと思つたのです。

第五福竜丸事件のことは、歴史民族資料館を見学し、くわしい内容を知りました。今からちようど五〇前、ビキニ環礁でアメリカの水爆実験に遭遇し、焼津市の漁船第五福竜丸は被爆したのです。その犠牲者である久保山愛吉さんに関する資料が印象的でした。東京で入院中の久保山さんと、焼津で暮らす妻のすずさんや三人の娘さんたちとを結ぶ往復書簡の一部を読みました。そこには、「一年生になつておめでとう」「妹を泣かせてはだめ」など、父親としての何気ない言葉が綴られています。多くを望まない家族のささやかな幸せを奪い

去つた水爆実験に対して、強い憤りを覚えました。

比較的狭いスペースに福竜丸の模型がありました。両手を広げた程の大きさの模型からだけでは、福竜丸の存在をあまり実感できませんでした。そして私は、保存されている第五福竜丸の実物を見てみたいと思ひ、東京都江東区の夢の島にある、第五福竜丸展示館を訪ねてみることにしました。

全長三〇メートル程の福竜丸は、下から見上げると一見大きく感じられました。しかし、鮪を追つて日本から数千キロ彼方の広大な太平洋で操業していたのであれば、あまりに小さな木造船であつたようにも思われました。その船は、世界で最初に水爆実験の被害に遭つた歴史の証人として、多くの人々の協力を得て、保存されていたのです。

ビキニ環礁での水爆実験は、その被害の大きさや、巻き込まれたたくさんの人々の苦しみを考えると、まるでひとつの戦争そのものだつたように思えます。長い間にわたつて続く被害者とその家族の

苦しみは、広島・長崎の被爆者と共通のものがあるのではないのでしょうか。こうした核兵器による被害は、再びあつてはならないことです。とりかえしのつかない過ちだと思ひます。

私の祖父は、太平洋戦争に巻き込まれた世代ですが、両親は、第五福竜丸事件よりも更に後で生まれ育つた世代です。しかし五〇年前の事件は、今を生きる私たちの問題でもあるのです。例えば、水爆実験の傷跡は今なおマーシャル諸島の人々の健康を侵しつつあります。地球上のどこかに核兵器がある限り、それはいつ私たちの身にふりかかると分らない、私たち自身の問題でもあるのです。

ビキニ環礁の水爆実験によつて被爆した多くの漁船の代表として、私たちは第五福竜丸事件の記録を保存し、核兵器の恐ろしさを語り継ぎ、決して忘れてはなりません。福竜丸の乗組員の方々やそのご家族が受けた、回復することのない痛み、消えることのない怒りや悲しみ、そして世界各国で報じられた久保山愛吉

さんの死を、決して忘れてはならないと思ひます。

「死の灰を超えて―久保山すずさんの道」という飯塚利弘さんの著書を読みました。水爆犠牲者の妻として、大きな悲しみを経験し、その後も様々な苦しみや悲しみの一つづつを乗り越え、原水爆禁止を願ひ、前向きに歩み続けた生き方に触れ、大切なことを学びました。

「原水爆の被害者はわたしを最後にしてほしい」という言葉を残してこの世を去つた久保山愛吉さん。そして「水爆をなくすためならどんな苦勞もいとみません。もつと地元の方々にかつてほしいと切に思ひます」そう願つたすずさん。地元焼津市民として、心からその願ひを受け止め、絶やすことなく引き継ぎがなければならぬと思ひます。そして、五〇年前の第五福竜丸事件を、わたしたち自身の問題として見つめ、一人一人が関心を寄せ、語り継いでいくことが、核兵器廃絶への着実な歩みとなるのではないのでしょうか。(うんの ゆか)

核のつくり出した光景を撮る

— オープニング・トークより —

豊崎 博光

私が第五福竜丸展示館での写真展をやるのは九四年と九七年につづき三回目です。

今日は二五年以上にわたる核取材の経緯などお話ししたいと思います

取材を始めるにはきかっけは一九七八年の二月から三月にかけて機密解除によって、第五福竜丸以外の被災船の存在が明らかになったことがきっかけでした。どのような船で、乗組員どうなったのか疑

問に思い取材を始めました。

しかし厚生省に聞いてもデータがなく国会図書館に通って当時の船籍名簿など調べましたが、当時はそれ以上には取材に至りませんでした。

同時に三月頃から「ビキニいぜん死の島」「島民ふたたびおいだされる」という記事が新聞に始まる、気になっていました。そんなときグアムの取材があり、マーシャル諸島へも行こうと決めました。

ところが首都のあるマジュロ島に着いてみると、予定していた離島へ行く巡航船は三日前に出た、三週間待てば帰ってくるという。ここまで来て帰るわけにもいかず、待つことにしました。それがよかったです。これがなければこの仕事に入っていくことにならなかったかもしれません。この三週間のあいだにマーシャルの人々と同じリズムで生活

し、本も読んで全体像をつかんでいきました。

フリーですからお金はないが時間だけはたっぷりあります。結局約束の船がきたのは三週間ではなく一ヵ月後で、さらに、船には予定をこえて四〇日間乗っていました。これをつうじて、このような隔離された暮らしの中に核実験の被害があるというのは、大変なことだと肌で実感しました。

この年は核問題のターニングポイントでした。マーシャル諸島を含むミクロネシアの国連信託統治が終わる時期でした。

一方、核実験の大元であるアメリカでは、スリーマイル原発の事故があった七九年の翌年、ワシントンで市民グループによる放射線犠牲者市民公聴会が開催されました。そこでさまざまなヒバクシャ核被害者がいることを初めて知りました。ウラン採掘に始まり、核物質製造過程での被曝や原発事故による被害などです。

ヨーロッパでは中距離核ミサイルの配備に対する反核運

動がおこり、アメリカではヒバクシャの認知・補償をどうするかという運動が始まったのです。

さまざまな国際会議に行く、日本では得られない情報と、現地で教えられる。また次の場所です。また友達の橋渡しで現地にたどりつきました。

核被害の実態

ふりかえってみると九六年まで毎年取材をしていきます。多いときには年に三回と、延々とやってきていました。しかし核被害を主題に決めて以来、焦りと苛立ちがありました。

ひとつは放射能・放射線という見えないものをどう撮るかということ。たとえはネバダ実験場の爆発地点を目の前にしながら、どう撮ったら伝わるんだろうかと悩むわけです。結局ありのままを撮ってくるしかない。撮ってきたものに取材データをつけて発表するしかないんです。

もうひとつは放射能と放射線の被害はヒバクも見えない

いし見えづらいということ。被害にあった人たちの写真をとつても人物写真にしかならない。核汚染地域で人々に聞いていくと、健康害だけではないものがあるということがわかりました。

さらに精神的被害があります。核実験に参加させられた兵士を取材したとき、医者の診断ではどこも悪くないのに、仕事に集中できない、他人にはわかってもらえない、と相談を受ける。これは精神的な障害です、核爆発の火球を見たりして異常な状況に置かれショックを受けている。いまいうところのPTSDです。

またさまざまな核被害史を調べていくと、そこに居住できなくなる、暮らしを変えさせられる。食生活を含め文化や伝統が成り立たなくなるといふこともわかってくる。

これは言葉では教えてくれないです。私は同じ場所へ何度も取材していますので、経過を肌で知ることによって深く深くです。そういった深く深い被害をどう写真で伝えるか (5めんにつづく)



(4めんからつづく)

るのか、と葛藤してきました。三年半前からは写真ではなく文章だけで伝える仕事もしてきました。マーシャルの人々の少ない証言・体験の記録を残さなくてはとまとめたものが来年日本図書センターより刊行されます。

見えないものを見る

ヒバクした人たちについてはすでに、私の写真を含め常設展示されているわけですから、ヒバクしている現地の光景の写真を中心に構成し今回の展示会を企画しました。

一九四五年の最初の原爆爆発地点から九六年まで継続して取材してきたほんの一部ですが、現場の写真を並べ、ぎりぎりの情報としてキャプションをつけました。写真のもっている現場のもつ意味合い——人々の暮らしかや伝統や文化、人々が精神的に病んでいるといったことなどを含めた、被害の深さやきわめて広範囲に及ぶことを、現地の光景から読みとってほしいと思います。

いまビジュアル時代で「見

えるもの」「見える写真」が当たり前のようになっています。しかし見える写真は見えるものしか伝えていない。しかし写真には見えないものも含まれています。そういう情報を皆さんに読み取ってほしいと思います。

例えば空から撮っている写真や望遠レンズで撮っているのは現場に入らなかったところからです。写真を見ていただければだいたいわかるとおもいます。ワイドレンズや標準レンズで撮っているものは、かなり現場に近づけたところだと思います。こんな場所から撮っている、ということとはつまり「ここにしか行けない」ということです。そのように写真を読み解いていただければありがたいと思います。

来年はヒロシマ・ナガサキをはじめ、核時代の六〇年がさまざまな振り返られると思います。核被害・影響は一元的ではなく幅広く深いものです。そのようなことを思い起こし考えていただければと思います(フォト・ジャーナリスト)。「写真展の会期は11月20日より1月23日まで」

第五福竜丸展巡回展示パネルの紹介

第五福竜丸平和協会は、ビキニ水爆実験被災五〇年にあたり、「第五福竜丸を知らない世代に伝える」ことを柱とする特別展・巡回展を企画し展示用パネルを製作しました。二〇〇四年八月には高知市自由民権記念館で、一月に京都・立命館大学国際平和ミュージアムにおいて特別展が開催されました。

この巡回展示パネルは、焼津歴史民俗資料館、日本新聞博物館、立命館大学国際平和ミュージアム、船舶通信士



国際平和ミュージアムにて

労働組合のご協力により作成されました。監修は安斎育郎・立命館大学国際平和ミュージアム館長、川崎昭一郎・第五福竜丸平和協会会長です。

△大規模展示会のためのセツトV展示パネル約七〇点(B2版) / マーシャル諸島・ロングラップ島のヒバクシャ約五〇点(現物写真パネル・全紙大) / 第五福竜丸関係現物資料約五〇点。開催にあたっての経費は、五〇〇一〇〇万円(輸送費含む)。

△コンパクト版展示パネルセツトVパネル三六点(B2版、アルミ枠製)、マーシャル諸島のヒバクシャ二〇点、第五福竜丸関係現物資料一〇点。開催経費は一二万円(輸送費含む)。

◇なお、一八枚組の小展示用パネルもあります。

*

本年春には、広島平和記念資料館の特別展として、また秋には長崎原爆資料館での開催が検討されています。

ビキニ水爆実験被災 50 周年記念出版

初めての図録 = 写真でたどる第五福竜丸

編集・発行=財団法人第五福竜丸平和協会 発売=平和のアトリエ

内容=刊行にあたって、都挨拶、グラビア・第五福竜丸、水爆実験との遭遇、乗組員のその後と久保山さんの死、「原子マグロ」と国民生活、ビキニの海へ—俊鶴丸の海洋放射能調査、漁船第五福竜丸、原水爆反対の声おこる、乗組員へのお見舞いの手紙、漁業補償と事件の「착着」、マーシャル諸島の核被害、第五福竜丸の保存と展示館の建設ほか。解説=水爆実験と日本の科学者、第五福竜丸の現在—日本経済への影響、マーシャル諸島の核被害者ほか

展示館特別価格 2000 円(送料ふくむ) A4版、104 ページ

平和のための博物館・市民ネットワーク第4回全国交流会 夢の島で

去る11月27日・28日、夢の島公園内の東京スポーツ文化館において、市民ネットの交流会が開かれ38名が参加しました。

交流会が2日間の日程でおこなわれるのは、昨年の立命館大学国際平和ミュージアムについて2回目、山辺昌彦平和ミュージアム学芸員と東京大空襲戦災資料センターの梶慶一郎事務局長の司会ですすめられました。

第五福竜丸平和協会からは、安田事務局長が展示館と50周年記念事業について、大幡嘉子さんがボランティアの会の活動やアジアボランティアセンターのスタディツアーに参加したマーシャル諸島での体験などを報告しました。また、平和協会の藤田秀雄副会長から「平和のための行動者」となるための報告・提言がありました。

高知県幡多高校生ゼミナールの活動が各種の受賞

高知県のビキニ水爆実験の被災船について80年代半ばから体験者の調査をおこなっている高知県幡多高校生平和ゼミナールと高知県ビキニ水爆実験被災調査団がまとめた『もうひとつのビキニ事件』（平和文化刊、2004年3月）がこのほど第10回平和協同ジャーナリスト基金大賞を受賞しました。

また調査団の活動をとりあげた南海放送のテレビドキュメンタリ『わしも死の海におった～証言・被災漁船50年目の真実』が、第24回「地方の時代」映像祭・コンクールでグランプリ、第4回石橋湛山記念・早

稲田ジャーナリズム大賞を受賞しました。

立命館大学での第五福竜丸展より

京都・立命館大学国際平和ミュージアム秋期特別展の「ビキニ水爆被災50年展—放射能と人類」は、10月28日から11月23日の会期で、国際平和ミュージアム・中野ホールで開かれ、5165名の入場がありました。

同展入館者の感想文からいくつか紹介します。

- *戦争の苦しさや厳しさを思い知りました。今、生きているのがとてもよいことだと思いました。久保山さんという人が、とても印象に残りました（宮崎県 中学生 女）。
- *一日づつ紙をめくるカレンダーでは、当日の日がそのまま残されていて、言葉では表せない気持ちになりました。戦争という言葉の後ろにはとても悲しい出来事があったことがわかった（京都府 中学生 女）。
- *読む資料を見てとっても感激した。やっぱり戦争は良くないと思った（埼玉県 高校生 男）。
- *戦争、原水爆の恐ろしさを知らない世代にこそ、このような展覧会に足を運び事実を見ること、知ること、感じることの重要性を再認識しました。やはり人類は一切の戦争を放棄しなければならず、それが明記されている憲法9条は守られ、育てられていくべきである、という答えにたどりつきました（本学3年生 男）。
- *ビキニ水爆の被害については、第五福竜丸のことは知りませんでした。マーシャル諸島の人々の苦しみをみて、「平和」という言葉の重みを感じました。今も多く残る核兵器。人々の相手国に対する不

信を取り払い、仲良くできる世界をつくるために努力します（本学学生 男）。

- *言葉を失いました。また第五福竜丸の保存が一市民の新聞への投書によってよびかけられ、その後保存運動が起こったことには考えさせられました（本学大学院生 女）。

三好和夫医師、熊取敏之医師逝去

第五福竜丸の乗組員が被災し治療を受けるため東京に移送された東大病院での主治医をつとめた三好和夫医師（元徳島大学医学部長）が去る12月9日に肺炎のため亡くなりました。90歳でした。

また、国立東京第一病院に入院した久保山愛吉さんをはじめ16名の患者の主治医となった熊取敏之医師（元放射線影響研究所所長）が12月11日に亡くなりました。83歳でした。

熊取さんは、久保山さんの死にたいし当時、「まぎれもなく放射能症による続発症で死去した」と述べました。03年9月にお見舞に伺った平和協会職員に「みな被爆者だから心配」と語られていました。

ご冥福をお祈りします。

ボランティアの会元気で活動

・10月31日～11月1日に研修旅行で神奈川県三崎漁港をたずね森田喜一さんを講師に学習。事代漁業の寺本光一さんからも話をうかがう。

・11月28日に高知・草の家事務局長の金英丸（キムヨンファ）さんを講師に朝鮮半島のこんにちについて学習。12月19日は豊崎博光さんを講師に「世界の核被害」の勉強会開催。